令和４年度　教育コミュニケーションコース

修士論文成果発表会

令和５年２月23日（木）

子午線ホールという素晴らしい会場で修士論文の成果発表会が行われました。今回も「ハイフレックス」の方式を採用し、ちょっとしたハプニングが起きながらも無事発表会を終えることができました。達成感と少しの名残惜しさを感じさせるような発表は以下のテーマで行われました。

◆　自己への気づきを促すアート表現の可能性―可視化・空間化された自己世界の検討を通して―
◆　「社会に開かれた教育課程」を実現するための教職員の同僚性に関する研究
　―チームに対する認識や他者とのかかわりの視点に着目して―
◆　機械的公式観を克服し学習者の興味を喚起する算数の援助法の探究
◆　キャリア教育における高校生の進路指導についての研究
　－生徒に求められる能力と教師の関わりかたに注目して－
◆　「わからないこと」に対する教師と子どもの協同的探究
　―ウィトゲンシュタインの言語ゲーム論を手がかりにして―
◆　教員の語りにみる「チーム学校」に関する一考察
◆　「道徳は教えられるか」―貝原駅益軒の教育思想を手がかりとしたそれが孕む諸問題の考察―
◆　リフレクションを促す教育実践が言語聴覚士の後進指導に及ぼす影響
　―指導経験者を対象としたワークショップを手がかりにして―
◆　日本語教育における意味の伝達と創造に関する研究
　―言語行為におけるコンテクストの共有と意味の脱構築に着目して―
◆　青年期の恋愛依存に関する研究
◆　看護教育における社会保障制度の知識と実習を関連づける授業の探究
　―地域・在宅看護論の授業実践を通して―
◆　学校でシティズンシップを育むための体験活動に関する研究
　―デューイの経験論における「試みること」と「被ること」の検討から―
◆　商業高校に勤務する教員の働き方とその特質に関する研究

これから修士課程を修了し、その成果を発揮される方々の発表は「考える」ということを触発する力に満ちていたように思います。それぞれの発表は時間の関係もあり端的なものでしたが、言葉の端々から研究を進める中での苦悩を感じることがありました。それと同時に、それぞれ未だ残された課題を展望しつつ一旦自らの研究を閉じられ、そのことに達成感を感じている様子もうかがえました。

後輩たちにとっては自らの感じる研究への不安や喜びが結実する多様な姿形を見ることができ、研究を進めていく勇気をもらったように思います。

先輩方、お疲れ様でした。